

2011 Formula Nippon
Project μ /CERUMO・INGING Race Report
第4戦 ツインリンクもてぎ

□ 8月7日 (日) 決勝

#33 国本 雄資 12位

< 決 勝 > 天候:曇り~晴れ | コース状況:ドライ



公式練習でブレーキトラブルを抱え、思うようにセットアップが進まぬまま臨んだ予選では、惜しくも Q3 進出は果たせなかった土曜の Project μ /CERUMO・INGING と国本。しかしながら攻めた結果のコースオフとあってか、予選終了後のチームやドライバーの雰囲気はポジティブなものであり、この日の決勝での初ポイント獲得に向け、チーム一丸となって立ち向かう雰囲気がピットに溢れた。

迎えた日曜のもてぎは、薄曇りながらも前日より爽やかな陽気となった。決勝前の最後のセッションとなる 30 分間のフリー走行は、ドライコンディションで午前8時 35 分にスタートとなったが、国本はセッション開始と同時にコースイン、精力的に周回を重ねることとなった。

コースイン後、計測 1 周目はピットロードを通過したこともあって 2 分 09 秒台とした国本だが、翌周からは 1 分 39 秒 658、1 分 40 秒 939、1 分 39 秒 722、1 分 39 秒 445、1 分 39 秒 557 と、決勝を見据えた連続周回をこなすと、合計 7 周を終えていったんピットに戻る。

しかし、この連続周回の途中でまたもブレーキの効きが悪くなるトラブルが発生したため、修復と若干の空力セットアップの修正を行い、午前8時 54 分にピットアウトした国本は、1 分 49 秒台から計測をスタートすると翌周から再び連続周回を敢行。しかし、ここではピットで燃料搭載量を増やしたこともありペース的には 1 分 41 秒前半という周回が多くベストタイムの更新はならず。結局このセッションでは連続周回に時間を費やした国本は、そのまま午前 9 時 05 分のチェッカーまで走行を続け、ポジションは 17 番手に。ピットイン直後にはタイヤ交換など決勝を想定したピットストップのシミュレーションをこなした Project μ /CERUMO・INGING と国本は、いよいよ午後決勝に臨むこととなった。

午後2時 30 分にフォーメーションがスタートする第4戦決勝は 52 週の戦い。12 番グリッドからポイントゲットを狙う国本は、8分間のウォームアップ走行でブレーキなどに問題がないことを確認、リラックスした表情でスタートの時を待つ。

1 周のフォーメーションの後、いよいよ午後2時 に戦いの火ぶたが切れて落とされた。ウォームアップで皮むきしたニュータイヤを履き、イン側 12 番グリッドからスタートした国本は、1~2 コーナーの位置取りでややポジションを下げ、1 周目を 14 番手で終える。予想外のポジションダウンに対応し、チームは2回義務付けされているタイヤ交換のうち、早々に 1 回目を消化すべく、国本を急遽2周終了時にピットへ呼び戻す。スタッフの迅速な作業で4輪交換を終えた国本は、いったん最後尾の 17 番手に下がるが、周囲にマシンのないコース上に復帰すると、そこから 1 分 39 秒台という上位陣と遜色の無いペースで周回し始める。

6 周目、先行していた山本尚貴がピットに入り、ここで国本は 16 番手に浮上。さらに翌周中嶋大祐がピットに入ったことで、国本は 8 周目には 15 番手へとポジションアップを果たす。

ところが、背後にピットアウトして来た中嶋大祐が、国本を上回るペースで追い上げてくると、いったん2秒2としていたギャップが、10 周

目には1秒を切ることに。翌周インペラトリーがピットインしたことで、14番手となった国本だが、背後の中嶋大祐との差はコンマ3秒に接近。バックストレッチではオーバーテイクボタンを使いながら逃げようとした国本だったが、90度コーナーのブレーキングでインを突かれポジションダウン。武藤英紀のピットインでポジションこそ14番手と変わらないものの、序盤は苦しい戦いを強いられる。

さらにインペラトリーの攻勢を受ける国本は、ややペースを下げ1分40秒中盤のペースで周回。14周目に小林崇志がピットインしたため13番手となるが、インペラトリーはコンマ数秒差で国本のテールに食らいついてくる。アンドレア・カルダレッリのピットインで16周目に12番手に浮上した国本だったが、その周にインペラトリーにかわされた国本は、再び13番手に後退を余儀なくされる。

他車のピットインと小暮卓史のコースアウトにより、11番手に浮上した国本は、「頑張れ！」との立川監督からの無線での叱咤激励を受け、ラップタイムをやや持ち直し1分40秒台前半として周回を重ねて行く。しかし、今度は背後に武藤が迫り始める。レース折り返しとなる26周終了時点で、国本と武藤の差は僅かにコンマ7秒という状況。しかし、ポジション的にはライバル陣営のピットインにより、国本は10番手にポジションアップする。

28周目に武藤がピットに入ったことで難を逃れた国本は、翌29周目に2回目のピットイン。ここで給油と4輪交換を行った国本だったが、ここで先にピットを終えていた武藤の後塵を押し、ポジションは16番手に。しかし、30周あたりから続々と2回目のピットインを行う陣営があり、国本はじりじりとポジションアップ。31周目に15番手、32周目には14番手に。さらに1分39秒台前半へとペースアップした国本は、前を行くインペラトリーを追いつめて行く。

36周目、インペラトリーとの攻防を続ける国本は、その状況のままポジションは12番手に。早めにピット作業を終えたことが奏功した格好だが、さらなるポジションアップにピットの期待が高まる。

しかし、このあたりから国本の背後にはカルダレッリが迫り、いつしか戦いはインペラトリー、国本、カルダレッリの三つ巴の攻防に。糸でつながれたかのように等間隔で周回を重ねる3台……。

43周目、トップのジョアオ・パオロ・デ・オリベイラに道を譲り、ラップダウンとなった国本だが、カルダレッリとの攻防は続く。オーバーテイクシステムも使い切り、必死の攻防を続ける国本だったが、カルダレッリの背後には山本までもが迫り、国本はさらに苦境に立たされることに。

オーバーテイクシステムを使い、追い越しを仕掛けようとするカルダレッリと山本、ファイナルラップまで続いたそのプレッシャーを凌ぎ切った国本は、結局51周を走破し午後4時ちょうどに12位でチェッカー。ポイント獲得こそならなかったものの、国本は苦しいレースでライバルたちの猛攻に耐え切る奮闘を見せることとなった。



ドライバー／#33 国本 雄資

「もてぎはブレーキに厳しいコースでみんな同じ状況なのかもしれませんが、決勝でもやはりブレーキがキツク、大変なレースになってしまいました。段々効きが悪くなってしまい、ポジションをキープすることが出来ませんでした。終盤になって、なんとかカルダレッリ選手を抑えることはできましたが、本当にブレーキは厳しかったですし、トラクションも無くて……。ただ、今回もそうでしたが、スタートして10周前後のペースがいつも良くないので、自分にも問題があると思いますし、恐らく気持ち的に一番辛いところなのでしょう。次の鈴鹿は開幕戦で良いレースが出来ていたという印象がありますし、10周前後の問題

のところでもっと全開で走れるように、努力したいと思います」

監督／立川 祐路

「今週末はなかなか流れに乗り切れず決勝でも苦しいレースになってしまいました。いろいろ原因はあったように思います。スタートでポジションを下げてしまい、ペースの遅いマシンが前に入ったので、急遽2周目にピットインさせることにしましたが、その後のペースが今ひとつ上がらなかったですね。しかし、次の鈴鹿は既に経験済みのコース。ルーキー国本にとってはここまで毎戦初めてのサーキットだったわけですが、そういう意味で次こそ結果を残しに行ってもらいたいと思います」

